

資 料

市町村保健師のキャリアディベロップメントに関する研究

－保健師の活動の課題－

A study of career-development for public health nurses.

－ Problems of public health nurses －

山路真佐子, 千田みゆき, 菊池チトセ

Masako Yamaji, Miyuki Chida, Chitose Kikuchi

キーワード：保健師, キャリアディベロップメント, 活動の課題

要 旨

市町村で働く保健師の現状にあったキャリアディベロップメントを支援するために、保健師が抱える活動の課題を明らかにする目的で本研究を行った。その結果、保健師研修に必要な要件と課題、新人研修に必要な要件と課題、保健師活動の課題、地域診断に関する課題が明らかになった。また、これらのことを考慮した研修や支援の必要性が示唆された。

1. はじめに

近年の少子高齢化や生活習慣病の増加等による社会状況から、地域社会における保健活動は今まで以上に重要になってきている。地域保健活動の中心を担う保健師の活動には、住民の健康意識の向上、健康課題の明確化による取り組みの推進、長期的視点からの予防活動の推進、住民や関係機関と協働しサポートシステムを構築することによる健康的な地域社会づくり（山口，1999）などがある。これらの活動を実施するうえで保健師には、①住民の健康・幸福の公平を護る能力、②住民の力量を高める能力、③政策や社会資源を創出する能力、活動の必要性と成果を見せる能力、④活動の必要性と成果を見せる能力、⑤専門性を確立・開発する能力（岡本ら，2007）が求められている。このような保健師の専門的能力や技術を向上させるためには研修や学習の場が必要であるが、県などが主催する研修会は行政主導のもので

あり、地域の実情にあったものではなく、現場で働く保健師の求めるものにはなっていない場合が多い。また、保健師自らが業務研修会を年2～3回実施している地域もあるが、地域住民の健康に直結する活動として活かすまでには至らず、研修の方法と内容を模索しているという現状もある。

以上のような保健師の現状にふれ、保健師のキャリアディベロップメントを行っていくことが必要だと考えた。キャリアディベロップメントとは、「キャリアは個人が職業上の地位や役割を獲得しながら職業人としての能力やアイデンティティを形成していくことで、それを発達過程と捉え職業能力を計画的に向上させることでキャリアの上昇をめざすこと。人事・労務管理の側からいえば、そのように職員を動機づけその機会を与えること」（看護大事典，2003）である。地域の保健師の現状

受付日：2009年11月26日 受理日：2010年3月12日

埼玉医科大学保健医療学部看護学科 地域看護学分野

にあったキャリアディベロップメントのためには、地域の保健師にどのような課題があるのかを把握する必要がある。

従って、本研究では、教育研究機関である大学を地域保健システムの中の一つの社会資源と考え、市町村で働く保健師のキャリアディベロップメントへの具体的な支援を念頭に置き、地域の保健師の抱える活動の課題を明らかにすることを目的とした。

2. 用語の操作的定義

本研究では、キャリアディベロップメントを職業人としての能力やアイデンティティを形成していくことと定義する。

3. 方法

1) 対象

埼玉県西部の隣接した2つの地域で働く保健師で、研究の説明に同意を得た方とした。地域を選定するにあたっては、地理的特徴や人口規模が似ている地域であり、年に数回の保健師研修会を実施している地域とした。

2) 方法

グループインタビューを行った。グループインタビューは、そのインタビューを通じて、対象者のニーズや思い、認識を明らかにできる(Holloway,Wheeler, 2002)ものであり、量的研究や多種法研究にも適応できる(Holloway,Wheeler, 2002)ものである。

グループインタビューのテーマについては、佐伯ら(2004)の示した行政機関に働く保健師の専門職務遂行能力、岡本ら(2007)が示した保健師が強化すべき専門能力を参考とした項目による予備調査の結果に基づいた。予備調査結果では、保健師が学習したいこととして最も回答が多かったものは「自分の専門能力を開拓・成長することについて」であり、続いて回答が多かったものが「事業計画立案、事業評価について」「地域のアセスメントについて」であった。地域のアセスメントと事業計画立案・評価は関連があり、保健師の基本的な専門能力として重要である。そこで、グループインタビューのテーマは「自分の専門能力を開拓・成長することについて」「地域のアセスメントや事業計画立案・評価について」とした。

グループインタビューは地域毎に、2008年8月に実施した。携帯用カセットテープレコーダーを持参し、参加者の許可を得た上で録音した。

3) 分析

グループインタビューは、録音したものを逐語録にしたうえで内容分析を行った。類似内容を分類し、抽象

化していくことで、カテゴリーを抽出した。

3. 倫理的配慮

文書と口頭で研究の主旨、グループインタビューの方法、プライバシーの保護、参加の自由の保障、グループインタビューの拒否・中断の保障、インタビューは録音することなどを説明した。録音したインタビュー内容は逐語録にし個人が特定できないように分析すること、逐語録は研究者以外が使用できないよう保管すること、研究終了後は速やかに破棄することも説明した。グループインタビュー参加者全員から同意書に署名を得た上で、カセットテープレコーダーに録音した。また、研究結果についての学会等への発表に関しても説明した。

4. 結果

グループインタビューは、2つの地域で行い、それぞれの場所での参加者は5～6名であった。インタビューの時間は、78分～84分であった。内容分析の結果、大カテゴリーは《保健師研修に必要な要件と課題》《新人研修に必要な要件と課題》《保健師活動の課題》《地域診断に関する課題》の4つであった。以下、それぞれの内容において、中カテゴリーは<>、小カテゴリーは『』で記す。(表1)

(1) 保健師研修に必要な要件と課題

6つの中カテゴリーと14の小カテゴリーが抽出された。保健師研修に必要な要件として、<研修の必要性・有用性の理解><参加のしやすさ><職場としての努力><参加者の主体性>の4つの中カテゴリーが抽出された。<研修の必要性・有用性の理解>には、『新しい知識』『エンパワーメント』『実践に役立つもの』の3つの小カテゴリーが見いだされた。<参加のしやすさ>には、『参加型』『専門的かつ基本的知識』『段階を踏むプログラム』『近い場所での研修』の4つの小カテゴリーが見いだされた。<職場としての努力>では、『参加しやすい雰囲気・体制』『上司による参加の必要性の見極めと促し』の2つの小カテゴリーが抽出された。<参加者の主体性>では、小カテゴリーとして『興味・関心』『明確な参加理由』が見いだされた。

保健師研修の課題としては、<参加の難しさ><参加希望が少ない現状>の2つの中カテゴリーが抽出された。<参加の難しさ>では、『仕事との折り合い』『研修費の負担』の小カテゴリーが見いだされ、<参加希望が少ない現状>では『参加希望の少なさ』の小カテゴリーであった。

表1 保健師の活動の課題

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
保健師研修に必要な要件と課題	研修の必要性・有用性の理解	新しい知識
		エンパワーメント 実践に役立つもの
	参加のしやすさ	参加型
		専門的かつ基本的知識 段階を踏むプログラム 近い場所での研修
		参加しやすい雰囲気・体制 上司による参加の必要性の見極めと促し
	職場としての努力	興味・関心 明確な参加理由
	参加者の主体性	仕事との折り合い 研修費の負担
参加の難しさ	参加希望の少なさ	
新人研修に必要な要件と課題	望ましい指導体制	知識から体験へとつながるプログラム 明確な目標 先輩と一緒に評価すること ディスカッション プリセプター制
		新人の不安 指導担当でない人のかかわり方の不明確さ
	新人の自己評価に対する不安 指導担当でない人のかかわり方の不明確さ	
保健師活動の課題	活動方法のいきづまり	全体的なノウハウの不足 地域住民への啓発方法の問題 費用対効果の高い活動方法と施策への反映 の仕方の模索 いきづまり感
		専門性への疑問
	保健師の専門性	自立支援 地域サービスの調整 地域の力の育成 個人の経験等で養う部分と統一された水準 で担保された資質の調和
		保健師間のコミュニケーション不足
	地域診断に関する課題	学んだことの実践への活用
	データの活用 地域の把握 学んだ方法を地域にあてはめること 地域の評価 時間の確保 事業の意義・効果の明確化 マニュアルの整備	

(2) 新人研修に必要な要件と課題

新人研修に必要な要件として、＜望ましい指導体制＞の中カテゴリーが抽出された。小カテゴリーとして『知識から体験へとつながるプログラム』『明確な目標』『先輩と一緒に評価すること』『ディスカッション』『プリセプター制』が見いだされた。新人研修の課題としては、＜新人の不安＞＜指導担当でない人のかかわり方の不明確さ＞の中カテゴリーが抽出された。

(3) 保健師活動の課題

4つの中カテゴリーと10の小カテゴリーが抽出された。保健師活動の課題として＜活動方法のいきづまり＞＜専門性への疑問＞＜保健師の専門性＞＜保健師間のコミュニケーション不足＞の中カテゴリーが抽出された。＜活動方法のいきづまり＞では、小カテゴリーとして『全体的なノウハウの不足』『地域住民への啓発方法の問題』『費用対効果の高い活動方法と施策への反映の仕方の模索』『いきづまり感』が見いだされた。＜専門性への疑問＞では、小カテゴリーは『専門性への疑問』であった。＜保健師の専門性＞では、小カテゴリーとして『自立支

援』『地域サービスの調整』『地域の力の育成』『個人の経験等で養う部分と統一された水準で担保された資質の調和』が抽出された。＜保健師間のコミュニケーション不足＞では、小カテゴリーは『保健師間のコミュニケーション不足』であった。

(4) 地域診断に関する課題

中カテゴリーとして＜学んだことの実践への活用＞が抽出された。小カテゴリーは、『データの活用』『地域の把握』『学んだ方法を地域にあてはめること』『地域の評価』『時間の確保』『事業の意義・効果の明確化』『マニュアルの整備』が見いだされた。

5. 考察

1) 保健師研修・新人研修に必要な要件と課題

保健師研修に必要な要件は、＜研修の必要性・有用性の理解＞＜参加のしやすさ＞＜職場としての努力＞＜参加者の主体性＞であった。課題としては、＜参加の難しさ＞＜参加希望が少ない現状＞であった。保健師研修

を企画する際には、参加する保健師がどのようなことを望んでいるのか、日頃の保健師活動の中でどのようなことを課題としているのかを考慮することにより、保健師の主体的参加を促すことができると考える。また、必要な要件としての〈職場としての努力〉を満たすことで、課題である〈参加の難しさ〉を補えると考ええる。

保健師の新人研修においては、その養成の状況から丁寧な指導が必要であることが示唆された。具体的にかかわる仕組みとして、『プリセプター制』があり、その制度を取り入れている自治体も多い。しかし、本結果のように課題として〈指導担当でない人のかかわり方の不明確さ〉も生じていることから、新任時期の人材育成プログラム評価検討会報告（2006）が示しているように、新任者、プリセプター、管理者という個人だけが関与するのではなく、組織として取り組むことが重要だと考える。

2) 保健師活動の課題

現在の多くの保健師の業務は、業務分担されており、その扱う内容はより専門的になり複雑化している。このような状況が〈保健師間のコミュニケーション不足〉を招いているのではないかと考える。〈保健師間のコミュニケーション不足〉があると、問題を解決するための発想や視野が広がらず、解決策を工夫したり創出する力が育たず、〈活動方法のいきづまり〉を招くと思われる。保健師自身は〈保健師の専門性〉を『自立支援』『地域サービスの調整』『地域の力の育成』『個人の経験等で養う部分と統一された水準で担保された資質の調和』と概念的に捉えていた。しかし、〈保健師間のコミュニケーション不足〉があがったことから、コミュニケーションという実体験を通して、専門職としてのアイデンティティを相互に確かめたり、専門性を確認することができないと〈専門性への疑問〉が生じることがあると思われる。

保健師活動の中でのコミュニケーションは、信頼関係の確立や活動を推進するために重要であることは、様々な場面で言われている（佐甲，2009；堀井，2009）が、他職種や住民に対してのみならず保健師同士のコミュニケーションも重要であることが示唆されたと考ええる。従って、保健師間で課題を共有し、共に解決に向かえるような研修内容・方法を検討することが必要だと思われる。

3) 地域診断に関する課題

地域診断に関する課題については〈学んだことの実践への活用〉が見いだされた。地域の保健活動を行う保健師にとって、地域の健康について把握する活動は重要視され（吉岡ら，2006）、地域診断は地域保健活動を

行う際の基盤となるもの（Spradley,1991）である。その反面、保健師にとっての地域のアセスメントの困難さ（佐伯ら，2001）や、日常の業務と連動した地域のアセスメントの方法が明確化されていないこと（吉岡ら，2006）が指摘されており、本研究でも同じような結果であったと考える。保健活動の中では多種多様なデータを扱うが、それらのデータを概観し、その中から必要なデータを選び出し分析する『データの活用』の力が不足していることが考えられる。保健師養成機関等で既に学んだ地域診断の方法や理論を地域の実情にあわせて活用していくという『学んだ方法を地域にあてはめること』や、それらを総合的に分析して『地域の把握』を行っていく力、保健活動を実施した後で『地域の評価』をする力を高めていくことが重要だと思われる。小カテゴリーとして抽出された地域診断の課題は連動しており、これらの課題に取り組むことの必要性が示唆されたと考ええる。

4) 本研究の課題と今後の展望

本研究は、保健師のキャリアディベロップメントを支援することを念頭に行ったが、標準的な支援を構築するためには、さらに多くの地域で調査を実施する必要があると考える。また今後は、地域への支援の具体的な方法に関して検討していく必要がある。

6. 結論

今回の対象者が働く地域では、保健師研修に必要な要件と課題、新人研修に必要な要件と課題、保健師活動の課題、地域診断に関する課題が明らかになった。地域の状況にあわせながら、これらの要件を整え課題に取り組むことにより保健師のキャリアディベロップメントにつながると考えられる。今後、市町村保健師がこれらの必要な要件を満たしたり、これらの課題に取り組むことができるように支援していくことが重要だと考える。

謝 辞

ご協力いただきました保健師の皆様へ感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成 19 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費の助成を得て行った。

文 献

Holloway I, Wheeler S. (2002) / 野口美和子監訳 (2006) : ナースのための質的研究入門 (第 2 版), 医学書院, 東京.
堀井とよみ (2009) : ネットワーク形成に求められる他職

種とのコミュニケーション, 保健師ジャーナル, **65** (7), 561-568

岡本玲子 主任研究者 (2007) : 変革期に対応する保健師の新たな専門技術獲得に関する研究, 厚生労働科学研究費補助金平成 18 年度報告書.

佐伯和子, 和泉比左子, 加藤欣子他 1 名 (2001) : 保健活動における地域の看護アセスメントの課題—保健師の認識を通して—, 日本地域看護学会誌, **3** (1), 142-149.

佐伯和子, 和泉比左子, 宇佐美代子他 1 名 (2004) : 行政機関に働く保健師の専門職務遂行能力の発達—経験年数群別の比較—, 日本地域看護学会誌, **7** (1), 16-22.

佐甲隆 (2009) : 保健師とヘルスコミュニケーション, 保健師ジャーナル, **65** (7), 522-529.

新任時期の人材育成プログラム評価検討会 (2006) : 新任時期の人材育成プログラム評価検討会報告書.

Spradley B. W. (1991) / 村嶋幸代, 野地有子監訳 (1998) : 地域看護活動の方法, 医学書院, 東京.

和田攻, 南裕子, 小峰光博編 (2003) : 看護大事典, 医学書院.
山口佳子 (1999) : 行政サービスとして機能する看護職が果たそうとしている役割, 日本地域看護学会誌, **1** (1), 56-62.

吉岡京子, 村嶋幸代 (2006) : 保健師による地域アセスメントに関する文献レビュー, 日本地域看護学会誌, **8** (2), 93-98.